

## 和歌索引

## あ

秋ふかき草の枕にわれそなくふりすてゝ  
 こしすゝ虫のねを 三三才⑩  
 あたにたゝなみたはかけし旅衣こゝろの  
 ゆきて立かへるほと 五才⑥  
 あつまちの磯山かせのたえまよりなみさ  
 へ花のおもかけにたつ 二七才②  
 あつまちの草の枕はとをけれとかたれは  
 ちかきいにしへの夢 三二才②  
 あつまちのさくらを見て忘れすはみや  
 この花を人やとはまし 二七才⑦  
 東路の空なつかしきかたみたにしのふな  
 みたにくもる月かけ 三四才⑥  
 あつまちのゆ坂をこえて見たせはしほ  
 木なかるゝはや川の水 一九才⑨  
 あなかしこよこ浪かくなはま千鳥ひとか

たならぬ跡をおもはゝ 四才④  
 あはれとやみしまの神の宮はしらたゝこ  
 ゝにしもめぐりにけり 一八才⑨  
 あまのすむその里の名もしら浪のよする  
 なきさに宿やからまし 一九才⑤  
 あまを舟こき行かたを見せしとや浪に立  
 そふうらのあさ霧 二〇才⑦  
 雨風も神のこゝろにまかすらんわか行さ  
 きのはりあらずな 一〇才⑧  
 いかにしてしはしみやこを忘貝浪のひま  
 なく我そくたくる 二六才⑥  
 いかはかり子をおもふつるのとひわかれ  
 ならはぬ旅のそらに鳴らん 三一才④  
 いたつらにあまの塩やくけふりともたれ  
 かは見ましかせに消なは 二八才①

## い

徒にめかり塩やくすさひにもこひしやな  
 れしさとのおま人 二四才⑥  
 一のみや名さへなつかしふたつなくみつ  
 なき法をまもるなるへし 九才⑦  
 いつくより旅ねの床にかよふらん思ひを  
 きつる露をたつねて 三二才④  
 いつの世のふもとのちりかふしのねを雪  
 さへたかき山となしけん 一七才②  
 いとゝ猶袖ぬらせとややとりけんまなく  
 しくれのもる山にしも 七才⑨  
 いのるそわかおもふことなるみかたか  
 たひくしほも神のまに／＼ 一〇才②  
 う  
 打しくれふるさとおもふ袖ぬれて行さ  
 きとをき野路のしの原 七才③  
 浦路ゆくこゝろはそさを浪間よりいてゝ

しらするあり明の月

二〇才③

お(を)

をのつからつたへし跡もあるものを神は  
しるらんしきしまのみち 一八ウ①

おほろなる月はみやこの空なからまたき  
かさりし波のよるく 二六才②

おもひ出るみやこのことはおほ井川いく  
せの石のかすもをよはし 一五才⑦

おもひをくこゝろとゝめはふるさとの霜  
にもかれしやまとなてして 六才⑨

おもひやれ露も時雨もひとつにて山ち分  
こし袖のしつくと 二一ウ⑨

か

かきくらし雪ふる空のなかめにも程はく  
も井のあはれをそしる 二二ウ⑧

かたふちのふかき心はありながら人目つ  
ゝみにさせかるらん 九ウ①

かもめゐる洲崎の岩もよそならず波の  
けこす袖に見なれて 一三才⑦

かよふらし都のほかの月見てもそらなつ  
かしきおなしなかめは 三四ウ⑩

かり初にたち別れても子をおもふおもひ

をふしのけふりとそみし 三四才⑩

かりそめの草の枕のよなくをおもひや  
るにも袖そ露けき 三三才⑦

かりの世のゆきゝとみるもはかなしや身  
をうきふねをうき橋にて 九ウ③

き

きえかへりなかわる空もかきくれてほと  
は雲井そ雪に成ゆく 二三才①

きえもせしわかぬ浦ちに年をへてひかり  
をそふるあまのもしほ火 二八ウ⑤

君ひとり跡なきあさの数しらはのこるよ  
もきかかすをことはれ 三八才⑥

君をこそあさ日とたのめふる里にのこる  
なてしこ霜にからすな 六才⑤

清見かた年ふる岩にことゝはん浪のぬれ  
きぬいくかさねきつ 一六ウ③

く

草も木もこそみしまゝにかはらねとあり  
しにも似ぬこゝちのみして 二九才⑧

朽はてしなからの橋をつくらはやふしの  
けふりもたゝすなりなは 一七ウ④

雲かゝるさやの中山こえぬとはみやこに

つけよ有明の月 一四ウ⑦

くらへ見よかすみのうちのはるの月はれ  
ぬこゝろはおなしなかめを 二七ウ③

こ

こえ暮すふもとのさとのゆふやみに松風  
をくるさよの中山 一四ウ④

こゝろからおりたつたこのあま衣ほさぬ  
うらみと人にかたるな 一八才④

こゝろからなにうらむらん旅衣たつ日を  
たにもしらすかほにて 二四才②

心のみへたてすとても旅ころも山ちかさ  
なるをちのしら雲 三二ウ⑧

ことゝはむはしとあしとはあかさりし我  
すむかたのみやこ鳥かと 一〇ウ⑧

恋しのふこゝろやたくふ朝夕にゆきては  
かへるをちのしら雲 三三才④

これを見はいかはかりかと思ひつる人に  
かはりてねこそなかるれ 三三ウ⑤

さ

さえ佗ぬ雪よりおろすふし河の川風こほ  
る冬のころもて 一七ウ⑩

さゝかにのくもてあやうき八はしをゆふ

くれかけてわたりぬる哉

一一才⑥

きためなき命はしらぬ旅なれと又あふさ

かとのめてふゆく

六ウ⑧

し

しくれけりそむるちしほのはては又もみ

ちのにしきいろかへるまで

一一ウ⑤

忍ひねはひきのやつなるほとゝきす雲井

にたかくいつかなのらん

三〇才④

しらさりし浦山風も梅かゝはみやこにゝ

たる春の明ほの

二六ウ⑧

白波のいろもひとつにちる花をおもひや

るさへおもかけにたつ

二七ウ⑤

白はまにすみの色なる嶋つ鳥ふてのをよ

はゝ絵にかきてまし

一三才②

す

すみわひて月のみやこをいてしかとうき

身はなれぬ有明のかけ

一二才⑨

そ

それゆへにとひわかれてもあしたつの子

をおもふかは猶そこひしき

三一才⑨

た

たか方になひきはてゝかふしのねのけふ

りのすゑの見えすなるらん

一七才⑨

たちそふそうれしかりける旅衣かたみに

たのむおやのまもりは

五ウ⑤

立はなれよもうき波はかけもせしむかし

の人のおなし世ならは

二〇才⑩

立わかれふしの煙を見ても猶こゝろほそ

さのいかにそひけん

三四才⑦

たつねきてわかこえかゝるはこねちを山

のかひあるしるへとそおもふ

一八ウ③

たのむそよしほひにひろふうつせ貝かひ

ある浪のたちかへる世を

二七ウ①

たのもしな身にそふ友と成にけり妙なる

法の花の契りは

二八ウ⑧

旅衣うら風さえて神無月しくるゝ雲に雪

そふりそふ

二二才⑥

旅衣なみたをそへてうつつの山しくれぬひ

まもさそしくるらむ

二一才①

旅人のおなしみちにや出つらむかさうち

きたる有明の月

一二ウ③

旅人はみのうちはらふゆふくれの雨にや

とかるかさめひのさと

八ウ⑥

旅人もみなもろともに先たちて駒うちわ

たすやすの川きり

七ウ⑥

玉くしけはこねの山をいそけともなをあ

けかたきよ雲の空

一八ウ⑦

玉つきをみるになみたのかゝるかないそ

こす風はきくこゝちして

二四ウ⑩

たれかきてみつつけの里ときくからにいと

ゝ旅ねそらおそろしき

一四才⑦

つ

つくつくと空ななかめそ恋しくは道とを

く共はやかへりこん

四ウ⑩

つたかえてしくれぬひまもうつつの山なみ

たに袖の色そこかるゝ

一五ウ⑧

つるによもあたにはならしもしほ草かた

みをみよの跡に残さは

四才⑦

と

とゝめをくふるき枕のちりをたにわれ立

さらはたれかはらはむ

三ウ⑥

な

なかゝれとあき夕いのる君か世をやまと

ことはにけふそのへつる

三七ウ⑤

夏衣はやたちかへてみやこ人いまやまつ  
らん山郭公 二九才⑤

ならはすよよそに聞こし清見かたあら磯  
なみのかゝるねさめは 一七才①

なるみかたわかの浦風へたてすはおなし  
こゝろに神もうくらむ 一〇才④

なをさりのみるめはかりをかりまくらむ  
すひおきつと人にかたるな 一六才⑨

ぬ

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたり  
さひしき竹のひとむら 一二才③

ね

ねられしな都の月を身にそへてなれぬ枕  
の浪のよるく 二六才⑧

は

はかなしや旅ねの夢にまよひきてさむれ  
はみえぬ人のおもかけ 三一才⑦

はま千鳥なきてそさそふ世中に跡とめむ  
とおもはさりしを 一〇才③

はま松のかはらぬかけをたつねきてみし  
人なみにむかしをそとふ 一三才⑤

はるくとおもひこそやれたひ衣なみた  
しくるゝほとやいかにと 二一才⑥

はるく二むら山を行すきてなをすゑ  
たとる野へのゆふやみ 一一才②

はるく行さき速くしたはれていかに  
そなたの空をなかめん 四才⑥

はれくもりなかめてわたる浦風にかすみ  
たゝよふ春の夜の月 二六才⑩

ひ

一かたに袖やぬれまし旅ころもたつ日を  
きかぬうらみなりせは 二三才④

人よりも心つくしてほとゝきすたゝ二声  
をけふそきゝつる 二九才①

ひまおほきふはの関屋はこの程のしくれ  
も月もいかにもるらん 八才①

ふ

ふる郷はしくれにたちしたひ衣雪にやい  
とゝさえまさるらん 二二才③

ま

まちけりなむかしもこえし宮ち山おなし  
時雨のめくりあふ世を 十一才⑧

まはれたゝ契むすふの神ならはとけぬう  
らみにわれまよはさて 九才⑤

まよはましをしへさりせははま千鳥ひと  
かたならぬあとをそれとも 四才⑨

み

見し世こそかはらざるらめ暮はてし春よ  
り夏にうつる木すゑも 二九才③

みつしほのさしてそきつるなるみかた神  
やあはれとみるめたつねて 一〇才⑥

水のあはのうき世にわたる程をみよはや  
せのを舟さほもやすめす 一四才②

みやこにはきゝふるすらむ時鳥せきのこ  
なたの身こそつらけれ 二九才⑤

都人おもひもいてはあつまちのはなやい  
かにとをとつてまし 二七才④

みやこまでかたるもとをしおもひねにし  
のふむかしの夢のなこりは 三一才⑤

む

むすふ手にゝこる心をすゝきなほうき世  
の夢やさめか井の水 八才④

め

めくりあふ末をそたのむゆくりなく空に  
うかれしいさよひの月 二一才⑨

も

もろともにめかり塩やく浦ならは中々袖  
に浪はかけしを 二五才⑨

ゆ

ゆかしさよそなたの雲をそはたてゝよそ  
になしぬるあしからの山 一九才①  
ゆくりなくあくかれ出ししいさよひの月や  
をくれぬかたみなるへき 二一才③

よ

夜もすから涙もふみもかきあへすいそこ  
す浪にひとりおき居て 二四才⑩

わ

我こゝろうつゝ共なしうつゝのやま夢にも  
とをき都こふとて 一五才⑥  
わかことも君につかへんためならてわた  
らましやはせきのふち河 八才⑧

我ためや涙もたかしのはまならんそでの  
みなとの浪はやすまて 一二才⑧

わか浦にかきとゝめたるもしは草これ  
をむかしのかたみとは見よ 四才②

わすられぬもとの心のありかほに野中の  
清水影をたに見し 三八才②

わたらむとおもひやかけしあつまちにあ  
りどはかりはきく川の水 一四才⑩